

九月十七日

昨夜、四つ目の月下美人が咲いた。月も無い平々凡々たる夜半に静かに咲いていた。今朝は休み明けで学生達が地下に戻ってくるらしい。皆大学へ戻す事だけは決めているが、ディテールは未決。今早朝北朝鮮に発った小泉純一郎首相の決断みたいなものだ。どうなる事やら。

オゾンロックスの山口さんからいただいたオーガニックコットン・竹炭ぞめのTシャツは身につけてみると大変に体になじむ。こんなに柔らかい感触のものは珍しい。

九時地下ミイティング。学生は大学へ戻した。当たり前と言えは当たり前なんだよな。十三時過大学。世田谷村市場、ガレージハウスの説明。これはほとんど無反応であった。十四時半三年生製図指導。及びアルヴァ・アールト講義。

コルビュジェのサヴォワ邸、ミースのフアンズワース邸、アールトの夏の家、そのどれかを増改築せよという課題だから、私も手を抜くわけには行かない。今年で設計力の地盤低下の歯止めを失くすは。

九月十八日

isの最終刊が送られてきた。表紙が凄く良い。真っ赤な地にタテに黒々と「終わり方の研究」そして左肩に横書きで、「isがWasになるとき」とある。編集長山内直樹氏の心情が良く表

現されている。isには随分お世話になった。そして述感もかけた。いつか又、何処かでお目にかかれるのを期待している。企業がサポートし続けた文化的雑誌としたら最良の部類に属し続けたと思う。誰もが無くなってから初めてその意味を了解するという様な鈍感さの中に居るのだが、isの終刊号もその愚鈍でしかも圧倒的に普遍的傾向を思い起こさせるに十分な出来栄である。山内編集長はこの縮少必然の時代には、その駆体が大き過ぎたのだと笑って一時、休養なさるのが良い。

日記のメモを書いて捨てたのは初めてである。たかが日記と考えて気楽に書き散らして二年以上になる。ちよつとスタイルを変えてみようかと試みたが、うまくいかなかった。こういうメモの形式は、やっぱり地でゆくしかないのだろう。それじゃなくては続かないのだな。

研究室から見える新宿西口の超高層オフィスビル群の光り方も鈍くてどんよりしてさえない。そう思ってみているから余計そうなのだ。時代のフィーリングかな、これ位が。

小泉純一郎首相訪朝の成否が話題になっている。マスメディアの論調はおおかた否定的な方向に傾き始めている。おそらくこのニュアンスは幾つかのディテールによって形成されているのだが、そのディテールの一つに外務省スタッフ等の例えば北朝鮮拉致問題の関係者に対する態度（ニュアンス）があるだろう。マスメディアはディテールの集積によって意志が決定される。細部の集積の背後にあるストラクチャーには思いを致さぬくらいが強い。マスメディアの宿命であろう。

九月十九日

ディエス・デル・コラル「アジアの旅」何度目かの再読であ

る。我々とは言葉の使い方、組み合わせ方、深度さえも違うような気がする。読む度に面白さが深くなる。これは厄介な本である。